



2005年1月発行

自分の羊の名を呼んで

「羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。門番は羊飼いは門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているのだから、ついて行く。」(ヨハネによる福音書 10章 1~6節)

同じ羊を飼うのでも、西方と東方では飼い方が違います。ヨーロッパでは、牧羊犬を使って羊を追い立てたり、集めたりします。それとは違い、聖書の舞台となった東方では、羊飼いと羊の関係は、もっと親密で、愛情に富み、一層人格的でした。力で従わせるのではなく、愛と信頼の上に成り立っていました。

羊は、村人が共有し、共同で管理した、“羊の囲い”、つまり羊の溜まり場で、夜を過ごしました。周囲はしっかりと石の塀に囲まれており、門には必ず門番がついて、寝ずの番をしたのです。朝になると、羊飼いが、それぞれ自分の羊を連れに来て、次々と牧草地に連れ出すのです。囲いの中では、誰の羊か見分けがつかないほどに、互いに入り交じって夜を過ごしたのに、朝になれば、ちゃんと羊は自分の羊飼いの声を聞き分けて、間違いなく、自分の羊飼いにだけ従って、囲いを出て行くのです。ナザレでお育ちになった主イエスは、幼い時分から、何時もそんな光景を身近に見ておられたので、ごく自然に、ヨハネによる福音書 10章にあるような、“羊飼いと羊の譬え話”をなさったのでしょう。

主イエスは、この譬えの中で、御自身のことを、「わたしは良い羊飼いである」(10:11)、と言われるとともに、また、「わたしは羊の門である」(10:7)、とも言われました。この“門”と言うことに関して、カルヴァンは、こんなふうに言いました。「教会に入る戸口は、キリストを通して以外にはない。キリストにのみその身を委ねる人たちこそ、真に羊小屋(即ち教会)に受け入れられ、その群れの内に加

えられることになるのだ」と。教会に入る門は、イエス・キリスト、ただ一つなのですから、その意味では狭き門なのですが、それは又誰に対しても開かれているので、此れほどに広い門も外にはないのです。

良い羊飼いでいますイエス・キリストは、決してご自分の羊を十把一からげには扱われません。夫々の違いを認め、個性を大切にされるので、一人ひとりの名を呼ばれるのです。

「ザアカイ、急いで降りて来なさい」(ルカ 19:5)、「ラザロ、出て来なさい」(ヨハネ 11:43)、と言うように、主イエスは、いつもその名を呼んで、闇から光へ、死から命へ、と私どもを呼び出してくださるのです。

パレスチナの自然は厳しく、草や水は何処にでもあるものではありません。しかし羊飼いは、ちゃんとその場所を知っていて、羊を間違いなく導くことが出来るのです。だから羊飼いは先頭に立って行くのです。危険な道は避け、野獣が襲ってくれば身を張って戦い、羊を守ります。羊そのものは、弱い動物なのですが、羊飼いが共にいることによって、どの動物よりも強くなるのです。羊が心掛けるべきことは、ただ一つ、羊飼いの声を聞き逃さないように、何時も耳をそばだて、ただその声だけに従うことなのです。

1933年ヒットラーがドイツの最高権力者となったとき、彼は、教会にも介入し、教会をも自分の意のままに支配しようとした。教会は、キリストに従うよりも、ヒットラーに従うことを強要されたのです。多くの教会が、これを受け入れ、教会の主が最早キリストではなく、事実上ヒットラーになろうとしたとき、これに抵抗して立ち上がった人々がいました。彼らは、教派を超えて、一つの告白の許に結集したのです。その告白は、バルメン宣言に結晶しました。その第1項には、ヨハネによる福音書 10章 1節と 9節も引用され、ヒットラーを盗人、強盗とみなし、「我らは、ただキリストにのみ従う」と宣言して、戦い抜きました。 牧師 三輪恭嗣

(2004年11月7日の礼拝説教より)